令和５年度　西海中学校だより

愛：西海 spirit　～前進～

校訓「自主・至誠・健康」　教育目標「自ら拓く心豊かでたくましい生徒の育成」
令和５年９月１日　第７号　西海市立西海中学校　校長　濵田　徳昭

社会を明るくする運動弁論大会

７月２５日（火）に開催された標記弁論大会に、学校代表として二人が参加しました。ここにその内容を掲載いたします。大島文化ホールという大舞台で、緊張感の中、二人とも自らの意見を堂々と述べ、聴く方々は、時折頷いておられました。弁論発表後、表彰式が行われ、西川　　さんは、中学校の部において２位を受賞しました。

演題「届けよう、この声を」　西海市立西海中学校三年　西川

「俺の親友だからやめてくれ。」

そうかばってくれたのは、みんなのムードメーカーＡ君でした。Ａ君は、話し方も陽気でみんなに好かれていたし、先生とも気軽に話す本当に普通の生徒でしたよ。そんな話をしたのは、先日陸上自衛隊の射撃訓練場で大きな事件を起こしてしまった自衛官候補生Ａ君の友だちという人でした。

私は、この事件の記事を目にしたとき、頭の中に大きな疑問が浮かび上がってきました。それは、友だちのことを必死に守っていたＡ君が、なぜこのような凶悪な事件を起こしてしまったのだろうと。

私は、人の命を奪うのは、この世で一番の悪だと思っています。ですから、殺人事件の犯人の子ども時代など想像もできなかったし、もともと恐ろしい性質を持っているのだろうとしか思っていませんでした。しかし、事件を起こしたＡ君は十八歳、私の兄と変わらない年齢です。そして、普通に学校生活を送っており、友だちを大切にしていたとも言います。Ａ君が事件を起こした背景を思い、犠牲になられた被害者の方、そしてそのご家族の悲しみを思い、しばらく頭から離れませんでした。

そんなことを思い悩んでいるときに、私の心にある場面が浮かんできました。

それは、私が生徒会長になって初めてみんなの前で挨拶をした日のことです。緊張で足が震え、のどがからからになりました。話す内容は前日までに何度も頭に入れたけれど、頭の中が真っ白になって言葉が出てこないのではないかと不安でたまりませんでした。「誰か助けて」、私の心はそう叫んでいたのかもしれません。必死で話し出して、しばらくたったとき、「頑張っていきましょう。」という、私の言葉にみんなが「はいっ。」と答えてくれたのです。私ははっとなりました。緊張で震えていた私を支え、力づけてくれた、みんなから温かい応援の声でした。そして心の中に温かいものが広がっていきました。私は思いました。大丈夫、みんながいる。やっていけると。

事件を起こしたＡ君にはそんな仲間が、そのときいなかったのでしょうか。あれほどまでの暴走を止められなかった原因の一つは、人との絆の乏しさではなかったのか、そう思い至ったのです。

私だって、あの緊張しながら話をした場面で、生徒会長としての仕事をしていく過程で、みんなから無視されたり、反応がなかったり、さらには「女のくせに偉そうに。」などと批判的な言葉を投げつけられていたら、どうだったでしょう。現実から逃げだそうとしたり、怒りを爆発させ、誰かを傷つけてしまったりしたかもしれません。誰だって境界線を越える恐れはゼロではないのです。私の声に応えてくれた周りからの声に、改めて「ありがとう」を言いたいと思っています。

私が生徒会長として、いいえ人間として学んだことがあります。それは、誰かの声に耳を傾け、その声に自分の声でしっかりと答えようということです。これは心と心のキャッチボールです。誰かの声を受け止め、私の声を届けます。私が支えられたように、誰かをそっと支えるために。

私たちが生きていくために大切なものは、自分自身を認めてくれる仲間の存在なのです。「認める」とはつまり、誰かの小さな声に耳を傾け、その人に笑顔を届けられるような言葉をおくることではないでしょうか。その小さなことの積み重ねなのではないでしょうか。

今年度の私たちの学校の生徒会スローガンは「開花～みんなでつなごう笑顔の輪～」です。私は、みんなが周りの声に耳を傾け、温かい言葉を、明るい笑顔を届け合うことを目指していきます。誰一人取り残さない学校、そして社会を築き上げるために。

演題「一人一人の人間がいる」　西海市立西海中学校三年　宮本

「男だから泣くな。」「女だから、家事はできるようになれ。」皆さんは、このような言葉を聞いたことはありませんか？

私はあります。「男だから」「女だから」、私がその言葉を強く意識したのは、あるできごとがあったからです。

私はソフトボールクラブに所属しています。先月、試合がありました。公式戦ではなかったので、それぞれのチームから審判を出さなくてはなりませんでした。一・二試合目にしてくださった方が不在になり、女性の保護者の方が入ってくださることになりました。ですが、「女性だからだめだ。」と言われ、相手チームの男性がやってくださることになりました。

私はこれを聞いたとき、不思議でした。ソフトボールの監督は、審判は女性がやっている公式戦もあると言っていました。なのにどうして断られたのでしょうか？

私は考えました。それは、「女性は危ないから、男性がやるべきだ」という固定観念があるからではないでしょうか。皆さんはどう思いますか？審判は、女性だけが危ないのではなく、男性でも同じです。

他にも、「男性は仕事、女性は家事や育児」といったことや、女性より男性の方が偉い役職に就くなどのイメージがあります。仕事でもそうです。男性は、政治家、自衛隊、消防隊、女性は看護師や保育士などのイメージがあります。会社の重要な役職は男性が担い、お茶くみなどは女性がいいなど、こういった男女差別は昔よりは改善されつつあるのかもしれません。しかし、私たちの生活のそこここにまだまだ潜んでいるような気がします。こういった暗黙の了解のような男女差別は、時として同調圧力となって人を傷つけます。「女のくせに、男のくせに」という言葉で。男性でも、自分は料理や家事が得意だから、結婚したら家で家事をしたいと思う人もいるでしょう。女性だって、政治家や自衛隊員になりたい、子どもをもっても仕事は普通に続けたい、高い役職に就きたいと望むことも当たり前なのです。

そうです。私たちは、男性・女性である前に一人の人間です。一人一人の望みは違うのです。そして、それは「LGBTQ」と呼ばれる性的少数者の人にとっても同じことです。一人一人が違う人間なのだから、一人一人の考えや価値観があって当然です。一人一人、個性や能力も違い、できることも違います。だからこそ、それが尊重され、みんなで支え合えれば、より良い社会になると思いませんか。

では、そうした理解し合い協力し合える社会をつくるためにはどうしたらいいのでしょうか。それは、まず正しく知ることからだと思います。男女差別の実態はどうなのか、LGBTQ とはどんな人々なのか、どんなことに困っているのか、その人の立場になって、その悩みや痛みを想像すること、そこまでできてはじめて、正しく知るということになるのではないでしょうか。

今、世界では、男性が育児休暇をとったり、大統領や首相が女性だったり、同性カップルの結婚が認められていたり…。世界の普通は、ずいぶん変わってきています。誰もが自分の考えや感性を押し殺して生きなければならない時代はもう終わらせなければなりません。

まずは正しく知りましょう。私たちは、一人一人違う考えをもった人間です。違うからこそ尊いのです。自分と違うからと言って、絶対にその人の全てを否定したり、悪口や陰口を言ったりしてはなりません。誰もがその個性や考えを尊重され、「あなたが大切。」と言ってもらえる社会になれば、どんなに世界は明るくなるでしょうか。一人一人違う人間だから、誰であっても自分の望みをもてる、そんな世界を目指していきませんか？